

本連載は今回で一旦終了です、皆さんも「超音波の生体作用に関する基礎研究法」の課程を修了し、夏休みです。これまでの連載記事は日本超音波医学会のホームページにまとめて掲載されていますので、いつでも補講可能です。ご活用下さい。

連載をはじめるとあたり、委員会で企画を議論しました。ポイントは3つです。①誰に何を書いていただくか、②どう書いていただくか、③どう読んでいただくか、です。①はもちろん一番重要です。学会誌の貴重な誌面にふさわしい内容と適任者を厳選しなければなりません。②は、専門ではない読者にも伝わるように書いていただくということです。原著論文は、その新規性や重要性が、その分野の専門家の視点から見て明確になるように書くことが重要ですが、この連載は専門家ではない方に読んでもらわなければ意味がありません。そして③は、実はこの点に結構こだわったのですが、たまたま通りすがった読者が、ちょっと読んでみようか、と思ってくれる気楽さとユーモアを醸し出すことです。名取先生のまえがきはそのため重要なしかけでした。

連載というジャンルは「超音波医学」の初の試みで、編集委員会にもずいぶんとご協力と励ましをいただきました。今回の企画がうまくいったのかどうか今はわかりませんが、もし将来、「どうすれば○○できるか」みたいな連載が本誌の誌面をまた飾ることがあれば、企画・執筆メンバーの望外の喜びです。さて、短いまえがきばかりではなく、まとまったものを読みたいという読者の声にお答えします。名取先生の本編をどうぞ。

日本超音波医学会機器及び安全に関する委員会  
工藤 信樹

## — その20 — おまえがやらなきゃ誰がやる

名取 道也

「おまえが打たなきゃ誰が打つ」に問題が提起され、驚いたのはつい先日でした。さすがに「おまえがやらなきゃ誰がやる」と叫んでも問題にはされないと信じております。連載の18回時にも申しましたが、4年前の機器及び安全に関する委員会で近藤隆先生から提案されてスタートしたこのシリーズ、今回で一区切りとさせていただきます。

この企画は「超音波の生体作用に関する基礎研究に興味を持つ若手研究者のためのガイドブック」になればとの趣旨で、多くのエキスパートの方々はどうすれば超音波の生物学的作用に関する実験ができるかのノウハウを出し惜しみしないで教えていただくことを目的として立てられました。

この連載は「細胞に超音波を当てたらどうなるんだろう？」という疑問を感じた方が（こんな純粋な疑問の持ち方は若い方ですね）、その疑問を解決するための実験のお手伝いをすることをめざしました。たったお一人でも、この連載をみて実験をスタートさせた方がいらしたら、こんなに嬉しいことはありません。さらにこの分野の研究をやってみて面白そうだから少し続けてみようかなと感じてくれたら最高です。

当然のことですが、この連載では、皆様に「成功体験」をしていただくことを願って執筆者の方々は筆をとられて来ました。前書きを担当させていただ

Michiya NATORI

Part 20. We have no one, but you!

東京医科大学産婦人科

Department of Obstetrics and Gynecology, Tokyo Medical University Hospital, 6-7-1 Nishishinjuku, Shinjuku, Tokyo 160-0023, Japan

Received on July 21, 2019; Accepted on July 23, 2019 J-STAGE. Advanced published. date: September 2, 2019